

令和4年度全国学力・学習状況調査結果（概要）について

浜田市教育委員会

1 調査の概要

(1) 調査実施日 令和4年4月19日（火）

(2) 調査の対象

国・公・私立学校小学校6年生（特別支援学校含む） 全児童

国・公・私立学校中学校3年生（特別支援学校含む） 全生徒

※ 特別支援学校及び小中学校の特別支援学級在籍者のうち、下学年の内容などに代替して指導を受けている児童生徒や特別支援学校の教科の内容の指導を受けている知的障がい者である児童生徒は、調査対象としない。

(3) 浜田市での調査対象児童生徒数 ・小学校 397名 ・中学校 386名

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査 小6：国語・算数・理科 中3：国語・数学・理科

② 質問紙調査 児童生徒に対する質問紙調査 学校に対する学校質問紙調査

2 各教科の平均正答率

理科については、前回調査が平成30年度であった。したがって、「差」については平成30年度との比較とした。

(1) 小 学 校

	平均正答率（％）					
	浜田市	島根県	全国	差(市一県) <昨年>	差(市一国) <昨年>	差(県一国) <昨年>
国 語	60.0	64.0	65.6	-4.0 <-2.0>	-5.6 <-3.7>	-1.6 <-1.7>
算 数	57.0	61.0	63.2	-4.0 <-3.0>	-6.2 <-6.2>	-2.2 <-3.2>
理 科	57.0	62.0	63.3	-5.0 <-4.0>	-6.3 <-6.3>	-1.3 <-2.3>

(2) 中 学 校

	平均正答率（％）					
	浜田市	島根県	全国	差(市一県) <昨年>	差(市一国) <昨年>	差(県一国) <昨年>
国 語	69.0	69.0	69.0	±0 <-1.0>	±0 <-3.6>	±0 <-2.6>
数 学	46.0	49.0	51.4	-3.0 <-2.0>	-5.4 <-6.2>	-2.4 <-4.2>
理 科	47.0	48.0	49.3	-1.0 <-4.0>	-2.3 <-4.1>	-1.3 <-0.1>

3 浜田市の結果

(1) 各教科の分類別集計結果の概要

※ ○：市が県を2ポイント以上、上回るもの

－：市と県の差が2ポイント未満のもの

△：市が県を2ポイント以上、下回るもの

① 小学校国語

学習指導要領の領域	対象設問数 14	平均正答率(%)			
		浜田市	島根県	差	
言葉の特徴や使い方に関する事項	5	63.2	68.6	-5.4	△
情報の扱い方に関する事項	0				
我が国の言語文化に関する事項	1	79.8	82.3	-2.5	△
話すこと・聞くこと	2	58.8	63.6	-4.8	△
書くこと	2	43.6	47.3	-3.7	△
読むこと	4	58.6	62.4	-3.8	△

② 小学校算数

学習指導要領の領域	対象設問数 16	平均正答率(%)			
		浜田市	島根県	差	
数と計算	6	64.8	67.5	-2.7	△
図形	4	56.9	60.7	-3.8	△
測定	0				
変化と関係	4	45.0	49.0	-4.0	△
データの活用	3	61.3	66.8	-5.5	△

③ 小学校理科

学習指導要領の領域	対象設問数 17	平均正答率(%)			
		浜田市	島根県	差	
「エネルギー」を柱とする領域	4	47.1	50.2	-3.1	△
「粒子」を柱とする領域	5	51.6	58.7	-7.1	△
「生命」を柱とする領域	5	70.6	73.6	-3.0	△
「地球」を柱とする領域	5	55.7	62.2	-6.5	△

④ 中学校国語

学習指導要領の領域	対象設問数 14	平均正答率(%)				
		浜田市	島根県	差		
知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方	6	72.0	71.5	+0.5	-
	(2) 情報の扱い方	1	48.7	46.6	+2.1	○
	(3) 我が国の言語文化	3	70.6	70.8	-0.2	-

思考力	A 話すこと・聞くこと	3	61.7	64.4	-2.7	△
判断力	B 書くこと	1	48.7	46.6	+2.1	○
表現力	C 読むこと	2	65.7	66.2	-0.5	-

⑤ 中学校数学

学習指導要領の領域	対象設問数 14	平均正答率(%)			
		浜田市	島根県	差	
数と式	5	50.0	53.9	-3.9	△
図形	3	37.1	41.1	-4.0	△
関数	3	38.8	38.9	-0.1	-
データの活用	3	55.1	56.8	-1.7	-

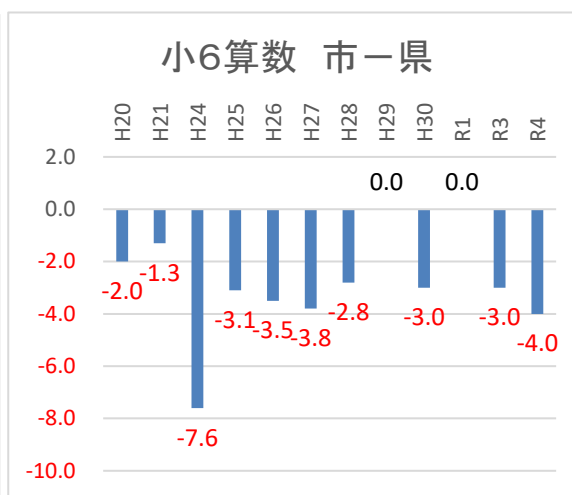
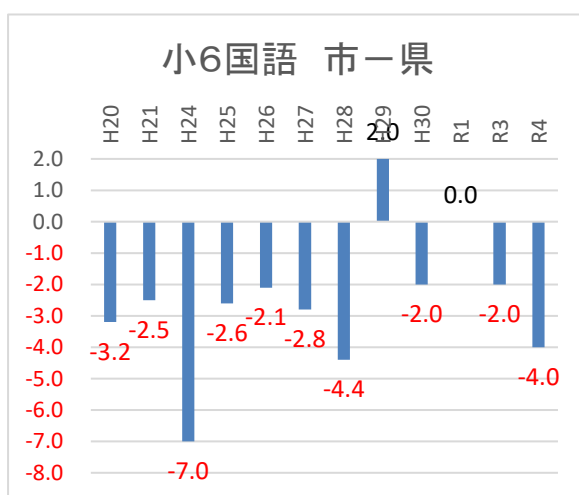
⑥ 中学校理科

学習指導要領の領域	対象設問数 21	平均正答率(%)			
		浜田市	島根県	差	
「エネルギー」を柱とする領域	6	37.7	40.6	-2.9	△
「粒子」を柱とする領域	5	48.5	49.9	-1.4	-
「生命」を柱とする領域	5	57.8	57.3	+0.5	-
「地球」を柱とする領域	6	42.6	43.6	-1.0	-

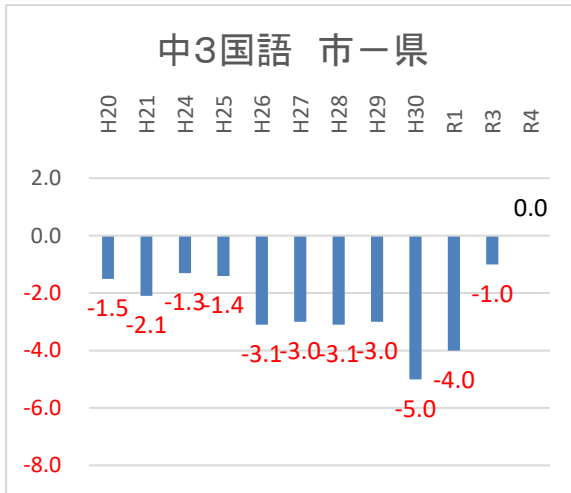
(2) 平均正答率の県との差の推移（理科については実施回数が少ないため省略）

小6国語

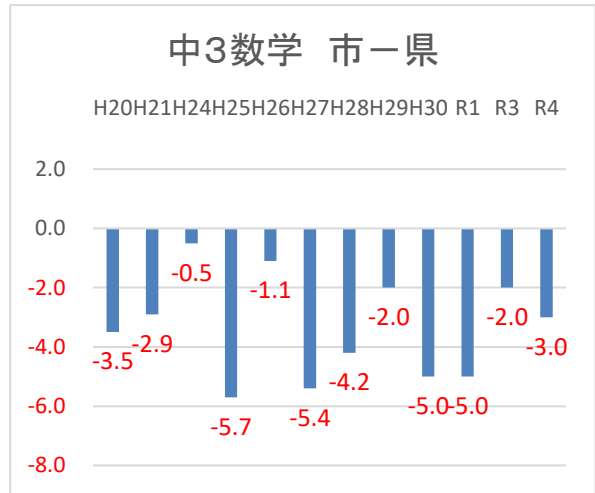
小6算数



中3国語



中3数学



(3) 対象学年の県との差についての経年比較 (理科については当該学年では実施がなかったため省略)

現中学校3年生

学年・学力調査種別	国語	算数・数学
R2県学力 (中1)	+1.3	-1.5
R3県学力 (中2)	-0.1	-1.2
R4全国学力 (中3)	±0	-3.0

現小学校6年生

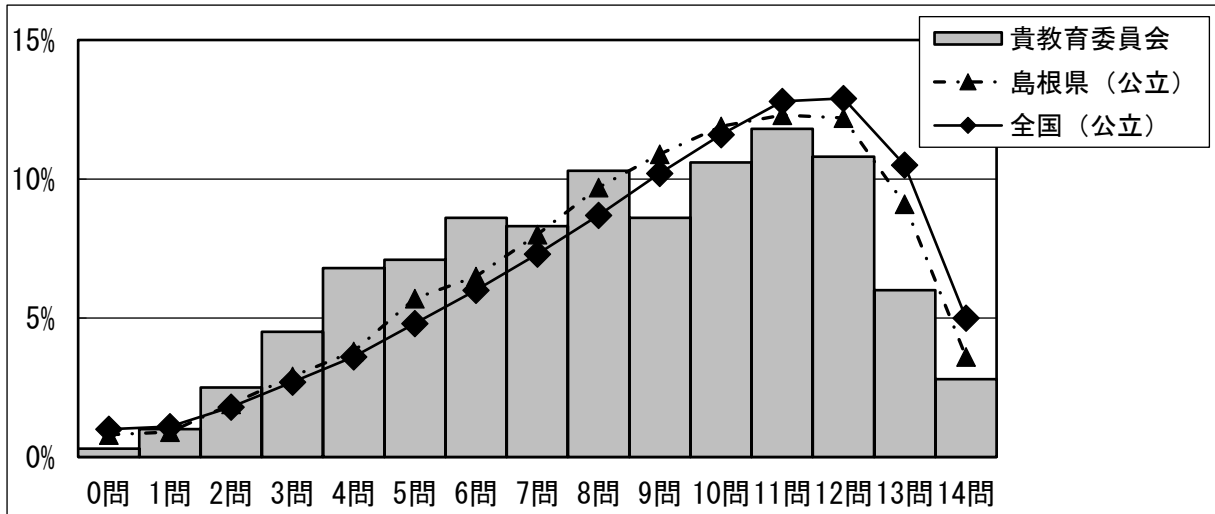
学年・学力調査種別	国語	算数
R3県学力 (小5)	-1.6	-3.3
R4全国学力 (小6)	-4.0	-4.0

(4) 問題形式別の県との差

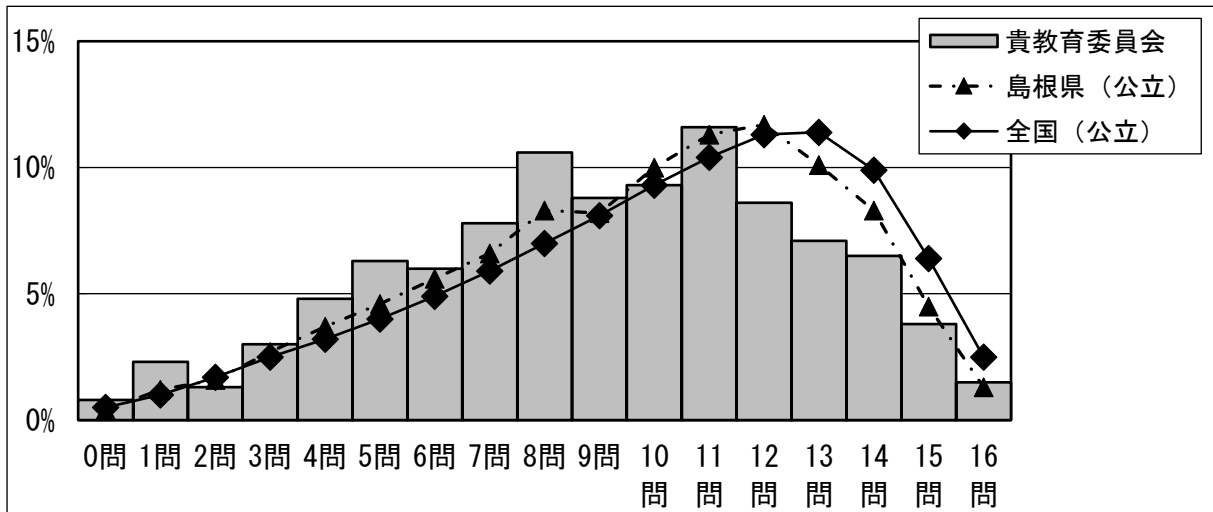
	小6国語	小6算数	小6理科	中3国語	中3数学	中3理科
選択式	-4.6	-4.7	-3.3	-0.4	-2.2	-1.3
短答式	-5.8	-3.3	-9.6	+0.3	-3.2	-3.3
記述式	-2.4	-3.8	-5.3	-0.2	-2.3	0.0

(5) 正答率分布

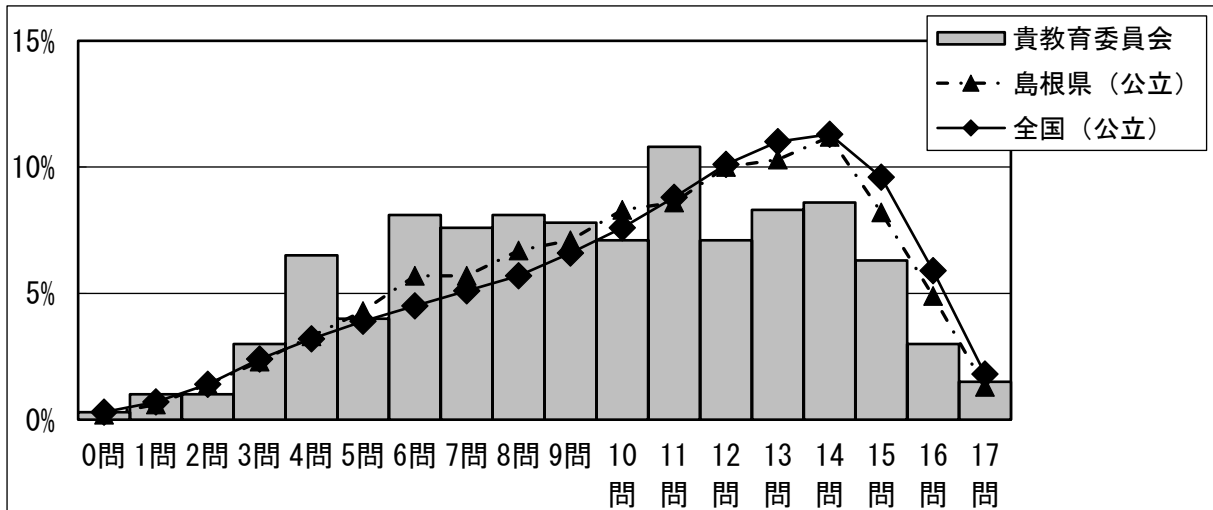
小6 国語



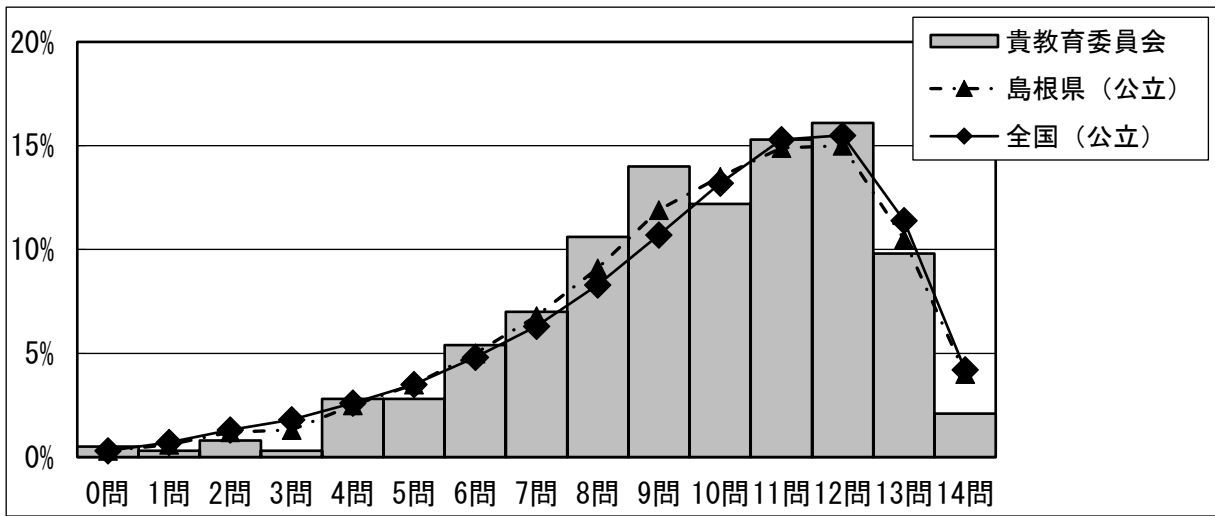
小6 算数



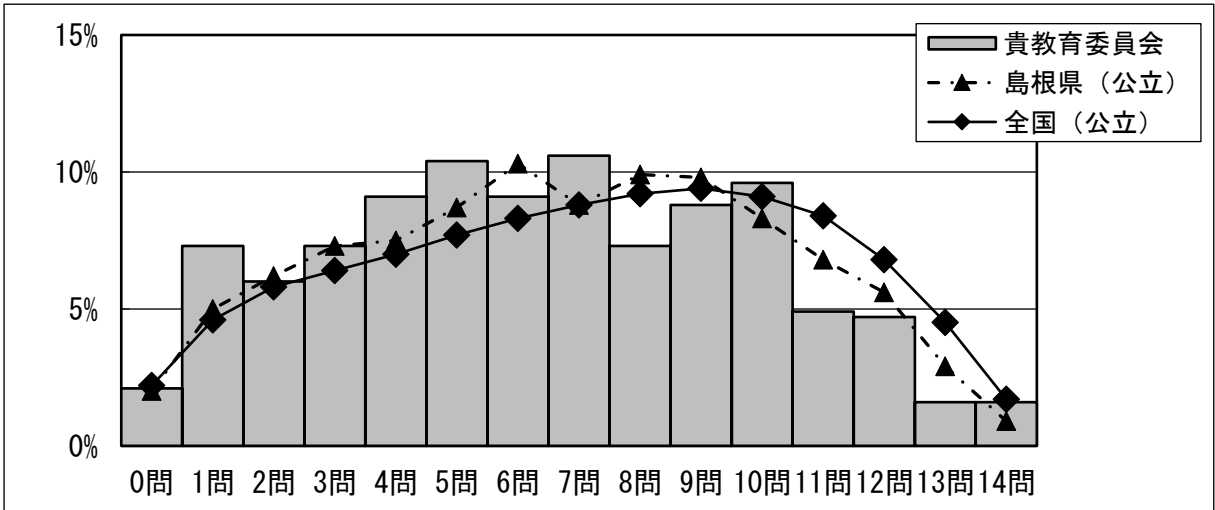
小6 理科



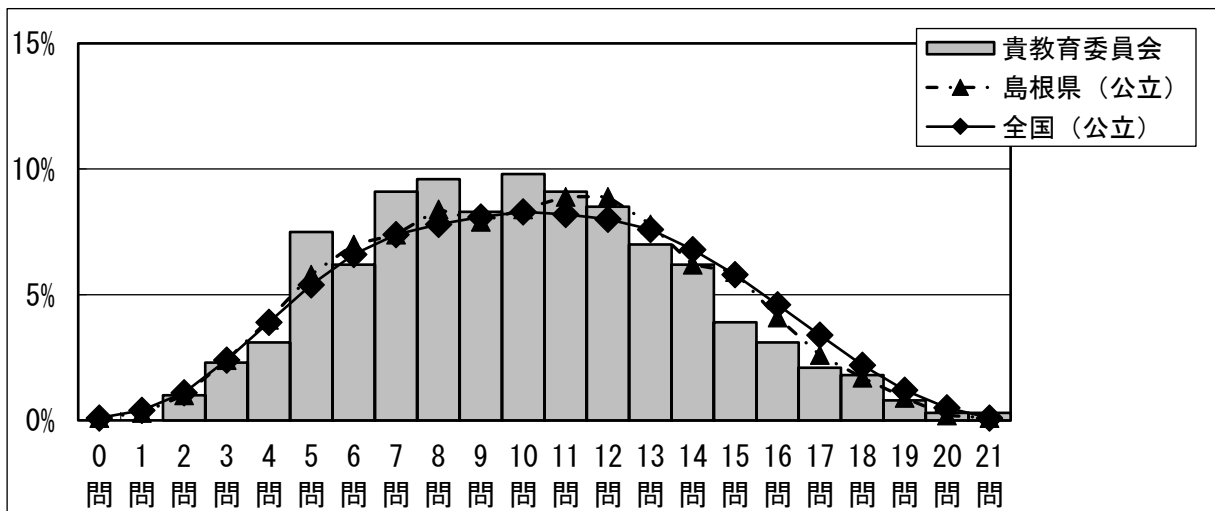
中3国語



中3数学



中3理科



(6) 教科に関する結果の概要

① 浜田市児童生徒の平均正答率の特徴

県平均正答率と比較して上回っている設問の上位3設問及び下回っている下位3設問の状況は以下のとおりである。

【小学校国語】

※ () 内の数値は、県平均正答率との差、問題形式欄の[]内の数値は全国平均正答率との差を表す

問題番号	正答率	問題形式	問題の概要	出題の趣旨	領域等
2二	67.8% (+1.3)	記述式 [-0.5]	物語から伝わってくることを考え、【森田さんの文章】の[A]に入る内容を書く	人物像や物語の全体像を具体的に想像する。	読むこと
3四	79.8% (-2.5)	選択式 [+1.9]	(一) から (二) に書き直した際、気を付けた内容として適切なものを選択する	漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書く	我が国の言語文化に関する事項
3二	37.3% (-3.2)	記述式 [-0.4]	【伝え合いの様子の一部】を基に、【文章2】のよさを書く	文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける	書くこと
3三イ	51.9% (-6.9)	短答式 [-6.8]	【文章2】の中の一部イを、漢字を使って書き直す(はんせい)	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う	言葉の特徴や使い方に関する事項
2一(2)	59.9% (-6.7)	選択式 [-10.7]	「老人」が未来の「ぼく」だと考えられるところとして適切なものを選択する	登場人物の相互関係について、描写を基に捉える	読むこと
3三ア	61.7% (-6.6)	短答式 [-3.5]	【文章2】の中の一部アを、漢字を使って書き直す(ろくが)	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う	言葉の特徴や使い方に関する事項

【中学校国語】

問題番号	正答率	問題形式	問題の概要	出題の趣旨	領域
2二①	87.8% (+4.1)	短答式 [+5.7]	漢字を書く(のぞく)	文脈に即して漢字を正しく書く	(1)言葉の特徴や使い方
2三	48.7% (+2.1)	記述式 [+2.2]	農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える	自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く	(2)情報の扱い方/B 書くこと
4三	83.9% (+1.6)	選択式 [+2.8]	書き直した文字の「と」の書き方について説明したものとして適切なものを選択する	漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解する	(3)我が国の言語文化
1二	61.4% (-3.6)	選択式 [-3.7]	話の進め方のよさを具体的に説明したものとして適切なものを選択する	論理の展開などに注意して聞く	A 話すこと・聞くこと
1三	48.2% (-3.6)	記述式 [-3.6]	スピーチのどの部分をどのように工夫して話すのかと、そのように話す意図を書く	自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話す	(1)言葉の特徴や使い方/A 話すこと・聞くこと
4一	35.8%	選択式	行書の特徴を踏まえた書	行書の特徴を理解する	(3)我が国

	(-2.9)	[-3.6]	き方について説明したものとして適切なものを選択する		の言語文化
--	--------	--------	---------------------------	--	-------

【小学校算数】

問題番号	正答率	問題形式	問題の概要	出題の趣旨	領域
4(2)	81.6% (+0.5)	短答式 [-1.6]	長方形のプログラムについて、向かい合う辺の長さを書く	図形を構成する要素に着目して、長方形の意味や性質、構成の仕方について理解している	図形
1(4)	30.5% (-0.5)	選択式 [-4.3]	85×21 の答えが 1470 より必ず大きくなることを判断するための数の処理の仕方を選ぶ	示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察できる	数と計算
3(1)	73.0% (-1.0)	短答式 [-2.3]	表のしりとり欄に入る数を求める式と答えを書く	表の意味を理解し、全体と部分の関係に着目して、ある項目に当たる数を求めることができる	数と計算 データの活用
3(2)	54.9% (-8.4)	選択式 [-9.0]	分類整理されたデータから、全員の希望が一つは通るように、遊びを選ぶ	分類整理されたデータを基に、目的に応じてデータの特徴を捉え考察できる	データの活用
3(3)	55.9% (-7.2)	選択式 [-10.9]	1年生と6年生が希望する遊びの割合を調べるためのグラフを選び、そのグラフから割合が一番大きい遊びを選ぶ	目的に応じて円グラフを選択し、必要な情報を読み取ることができる	データの活用
2(2)	52.9% (-6.4)	短答式 [-11.7]	果汁が40%含まれている飲み物の量が1000mLのときの、果汁の量を書く	百分率で表された割合と基準量から、比較量を求めることができる	変化と関係

【中学校数学】

問題番号	正答率	問題形式	問題の概要	出題の趣旨	領域
7(2)	46.9% (+1.2)	選択式 [+2.8]	箱ひげ図の箱が示す区間に含まれているデータの個数と散らばりの程度について正しく述べたものを選ぶ	箱ひげ図から分布の特徴を読み取ることができる	データの活用
8(1)	51.8% (+0.9)	短答式 [-2.8]	与えられたグラフにおいて、点Eの座標を書く	与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができる	関数
6(1)	70.7% (-0.4)	短答式 [-3.1]	同じ偶数の和である $2n + 2n = 4n$ について、 n が9のときどのような計算を表しているかを書く	問題場面における考察の対象を明確に捉えることができる	数と式
1	35.8% (-10.0)	短答式 [-16.0]	42を素因数分解する	自然数を素数の積で表すことができる	数と式
3	39.4% (-5.9)	選択式 [-5.5]	ある予想がいつでも成り立つかどうかを示すことについて、正しく述べたものを選ぶ	反例の意味を理解している	図形
6(3)	31.6% (-3.5)	記述式 [-6.0]	ある偶数との和が4の倍数になる数について、予想した事柄を表現する	結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができる	数と式

【小学校理科】

問題番号	正答率	問題形式	問題の概要	出題の趣旨	領域
3 (1)	30.7% (+4.2)	選択式 [+2.9]	光の性質を基に、鏡を操作して、指定した的に反射させた日光を当てることができる人を選ぶ	日光は直進することを理解している	「エネルギー」を柱とする領域
1 (4)	75.3% (+0.1)	選択式 [-0.8]	資料を基に、カブトムシは育ち方と主な食べ物の特徴から二次元の表のどこに当てはまるのかを選ぶ	提示された情報を、複数の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる	「生命」を柱とする領域
1 (5)	62.0% (-2.7)	選択式 [-3.5]	育ち方と主な食べ物の二次元の表から気づいたことを基に、昆虫の食べ物に関する問題を見いだし選ぶ	観察などで得た結果を、他者の気づきの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる	「生命」を柱とする領域
2 (1)	55.4% (-14.7)	短答式 [-12.4]	一定量の液体の体積を適切にはかり取る器具の名称を書く	メスシリンダーという器具を理解している	「粒子」を柱とする領域
4 (4)	52.1% (-7.6)	短答式 [-9.9]	鉄棒に付着していた水滴と氷の粒は、何が変化したものかを書く	水は水蒸気になって空気中に含まれていることを理解している	「粒子」「地球」を柱とする領域
4 (3)	36.0% (-7.2)	選択式 [-9.5]	結果からいえることは、提示された結果のどこを分析したものなのかを選ぶ	観察などで得た結果を、結果からいえることの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる	「地球」を柱とする領域

【中学校理科】

問題番号	正答率	問題形式	問題の概要	出題の趣旨	領域
3 (1)	82.9% (+2.8)	選択式 [+2.8]	分子のモデルで表した図を基に、水素の燃焼を化学反応式で表す	化学変化に関する知識及び技能を活用して、水素の燃焼を分子のモデルで表した図を基に化学反応式で表すことができるかどうかをみる	「粒子」を柱とする領域
4 (1)	78.8% (+2.3)	記述式 [+4.5]	ダイオウグソクムシとダンゴムシのあしの様子が異なることについて、生活場所や移動の仕方と関連付け、その理由を説明する	節足動物の外部形態の観察結果と調べた内容を、生活場所や移動の仕方と関連付けて、体のつくりと働きを分析して解釈できるかどうかをみる	「生命」を柱とする領域
2 (1)	52.6% (+2.3)	選択式 [-1.6]	観測した気圧と天気図の気圧が異なる理由を空気の柱の長さで説明する際、適切な長さの変化を選択する	観測した気圧と天気図の気圧が異なる理由を考える学習場面において、観測地の標高を空間的に捉え、気圧の概念を空気の柱で説明できるか問うことで、気圧に関する知識及び技能を身に付けているかどうかをみる	「地球」を柱とする領域
5 (2)	38.9% (-5.9)	選択式 [-6.1]	「ばねが縮む長さは、加える力の大きさに比例するか」という課題に正対した考察を行うために、	課題に正対した考察を行うためのグラフを作成する技能が身に付いているかどうかをみる	「エネルギー」を柱とする領域

			適切に処理されたグラフを選択する		
6 (2)	55.2% (-5.6)	選択式 [-5.1]	陸上のB地点で古生代のサンゴの化石が観察されることについて、垂直方向の変動だけで推論した他者の考察を検討し、水平方向の変動も踏まえた推論が必要であることを指摘する	過去の大地の変動について、垂直方向の移動だけで推論した他者の考察を、水平方向の移動も踏まえて、検討して改善できるかどうかをみる	「地球」を柱とする領域
7 (1)	26.2% (-5.2)	選択式 [-9.7]	液体が気体に状態変化することによって温度が下がる身近な現象を選択する	液体が気体に変化することによって温度が下がる身近な事象を問うことで、状態変化に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる	「粒子」を柱とする領域

② 国語について

平均正答率では、小学校60%（県64%）、中学校69%（県69%）。

小学校は、全ての領域で県平均を下回り、特に「話すこと・聞くこと」「読むこと」に課題がある。中学校は、全国平均正答率と同等となった。「情報の扱い方」「書くこと」については、対象問題数がそれぞれ1問ずつではあるが、県平均を2.1%上回った。一方で、「話すこと・聞くこと」に課題がある。

③ 算数・数学について

平均正答率では、小学校算数57%（県61%）、中学校数学は46%（県49%）。

小学校は、全ての領域で県平均を下回り、特に「データの活用」について課題がある。中学校は、全ての領域で下回り、「数と式」「図形」について課題がある。全国平均正答率との差は-5.4%（前回調査-6.2%）で少なくなっている。

④ 理科について

平均正答率では、小学校は57%（県62%）、中学校は47%（県48%）。

小学校は、全ての領域で県平均を下回り、特に「粒子」を柱とする領域及び「地球」を柱とする領域について課題がある。中学校は、「生命」を柱とする領域以外の領域で県平均を下回り、特に「エネルギー」を柱とする領域について課題がある。

⑤ 平均正答率の県との差の推移について

小学校では、国語、算数ともに前回調査結果を下回り、令和3年度以降は下降傾向にある。

中学校では、平成30年度以降、県平均との差が少なくなり、上向いてきている。しかし、数学については前回調査を下回った。

⑥ 調査対象学年の県との差の経年比較について

小学校6年生については、国語、算数ともに県との差が広がっている。中学校3年生については、数学の差が拡大している。

⑦ 問題形式別の県との差について

これまでの調査結果では、記述式に課題があった。今回の調査結果では、他の問題形式と比較して記述式の問題に対する課題は認められない。

児童生徒質問紙の国語、算数・数学における「全ての書く問題で最後まで回答を書こうと努力しましたか」については、小中学校共に県平均肯定率との差が+0.2%~+3.1%であったことから、書くことに対する抵抗が少なくなっている傾向は認められる。

⑧ 正答率分布について

小中学校共に高正答率者の割合が少なく、低正答率者の割合が高いことが課題である。

※ 中正答率層の児童生徒が高正答率層へ、低正答率層が中正答率層へ移行することができるように、少人数指導等をはじめとした個に応じた指導を実施していく必要がある。

(7) 児童生徒の意識調査から

○ 「自分には良いところがあると思う」児童生徒の割合

小学校は74.6% (R3年度:75.6%) で前回調査よりも1%下回った。中学校では76.8% (R3年度:76.1%) であり、前回調査を0.7%上回った。県との比較では、小学校が2.7%、中学校が4.2%下回っている。学校・家庭・地域が連携し、それぞれの立場で児童・生徒のよさを評価し、自己肯定感を育んでいく取組を充実させていく必要がある。

○ 「将来の夢や目標をもっている」児童生徒の割合

小学校は74.1% (R3年度:78.1%) で前回調査を4.0%下回った。中学校では66.6% (R3年度:64.4%) で前回調査を2.2%上回った。県との比較では、小学校が3.5%、中学校が1.1%下回っている。教育活動全体を通じた計画的なキャリア教育の推進が必要である。

○ 「1日あたり1時間以上家庭学習をする」児童生徒の割合

小学校は49.6% (R3年度:61.9%) で前回調査を12.3%下回った。中学校では、53.0% (R3年度:55.0%) で2.0%下回った。県との比較では、小学校が-10.6% (R3年度:-2.9%)、中学校が-4.1% (R3年度:-8.6%) で、中学校については県との差が少なくなっているが、小学校については逆に開いている。

○ 「家で自分で計画を立てて勉強をする」児童生徒の割合

小学校は60.7% (R3年度:68.6%) で、県との差は-11.2% (令和3年度:-5.3%) で前回調査を下回った。中学校は58.6% (R3年度:58.1%) で、県との差は-6.1% (令和3年度:-9.2%) で、改善が認められる。

○ 「普段、1日当たり2時間以上テレビゲーム(コンピューターゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む)をする児童生徒の割合

小学校は58.5% (令和3年度:53.1%) で、県との比較は6.9% (令和3年度:5.8%) と増加している。中学校では、51.6% (令和3年度:61.8%) で、県との比較は6.1% (令和3年度:9.8%) で改善が認められる。

※ 児童生徒が夢や目標をもって取り組んだり、自己肯定感を育んだりすることが可能となるように、キャリア・パスポートの取組を核としながら、キャリア教育を全教育活動に計画的に位置づけ、教育課程を編成して実践をしていく必要がある。

※ 家庭学習時間やメディア接触時間について、中学校において改善が見られている。学級活動等において自らの家庭学習や家庭での時間コントロールに関わる授業を全校体制で取り組んだ学校が増えたことも要因の一つである。この取組を広げていくとともに、日々の実践について記録し振り返る活動を実施していく。

(8) 学校質問紙（校長の自己評価）から

① 教職員の資質向上に関する状況

- ・ 校内研修で、児童生徒自ら課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動について学ぶ校内研修を行っている。

小学校は81.3%で県との比較では7.8%、中学校は88.9%で県との比較では30.4%上回っている。

- ・ 個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加している。

小学校は56.3%で県との差は-0.8%、中学校は44.4%で県との差は-7.8%であった。

② 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

- ・ 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができている

小学校は56.3%で県との比較では-24.8%、中学校は88.9%で県との比較では+12.4%であった。

児童生徒に対する意識調査の同様な質問では、小学校65.5%で県との差は-8.3%、中学校は88.9%で県との差は-1.8%であり、小学校の指導に課題がある。

- ・ 学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。

小学校は56.3%で県との差は-13.6%、中学校は88.9%で県との差は+9.6%であった。

児童生徒に対する意識調査の同様な質問では、小学校71.7%で県との差は-6.2%、中学校は80.3%で県との差は-0.1%であり、中学校の授業改善が進みつつある。

③ 国語の指導方法

- ・ 目的に応じて文章を読み、感想や考えをもったり自分の考えを広げたりする授業を行った

小学校では68.8%で県との比較は-23.5%、中学校は100%で県との差は+8.5%で、特に小学校における指導に課題がある。

④ 算数・数学の指導方法

- ・ 具体的なものを操作するなどの体験を伴う学習を通して、数量や図形についての実感を持った理解をする活動（中学校は、観察や実験などの活動を通して、数量や図形などの性質を見いだす指導）を行った

小学校は68.8%で県との比較は-22.5%、中学校は55.5%で県との差は-18.9%で小中学校共に課題がある。

- ・ 公式やきまり、計算の仕方などを指導するとき、児童（生徒）がそのわけを理解できるように（生徒がその根拠を理解できるように）工夫した

小学校は87.5%で県との差は-4.3%、中学校は88.9%で県との差は-5.8%であった。

児童生徒に対する意識調査の同様な質問では、小学校74.6%で県との差は-9.6%、中学校は81.4%で県との差は-1.4%であり、更なる授業改善が必要である。

⑤ 理科の指導

- ・ **自然の事物・現象から問題を見いだす指導を行った。**

小学校は68.8%で県との差は-21.0%、中学校は100%で県との差は+6.4%であり、小学校の指導に課題がある。

- ・ **自ら考えた予想や仮説をもとに、観察、実験の計画を立てることができるような指導を行った。**

小学校は75.0%で県との差は-15.3%、中学校は77.8%で県との差は+1.2%であった。

児童生徒に対する意識調査の同様な質問では、小学校63.5%で県との差は-9.1%、中学校は70.2%で県との差は+0.8%であり、小学校の指導に課題がある。

※ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた研修は実施されている。研修を行ったことが、実際の授業で生かされるようにしていくことが必要である。特に、小学校においては、このことについての取組を推進していく必要がある。また、小中学校共に個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加するような働きかけを進めていく必要がある。

※ 算数・数学が好きであるとする児童生徒を増やしていくために、学習することが身近な生活と結びつくような授業、実感を伴って理解をする授業、追究したくなるような授業を行っていく必要がある。

※ 理科好きな児童生徒を増やすため、自然の事物・事象の不思議さ等への驚きや疑問を持つことができるような授業、仮説をもとに観察や実験を行い、その結果からまとめを行う授業を行っていく必要がある。

※ 各学校においては、業務改善に取り組み、児童生徒に向き合う時間や研修・教材研究の時間を生み出す努力も行っている。このことに対し、行政が行える支援を検討し、実施していく必要がある。

4 今後の取組の方向性について

(1) 「知識・技能」の確かな定着への取組の継続

各学校が、基礎的学力育成のために行っている取組（基礎学力テスト、書き取り会、計算会、家庭学習の工夫、家庭学習の定着、プリント配信システム（タブレットドリル版）の活用、指導・支援が必要な児童生徒への指導の時間確保等）は、今後も継続して、基礎的・基本的な知識・技能の定着を確かなものとしていく。

(2) 授業改善、「思考力・判断力・表現力」の育成

「思考力・判断力・表現力（課題解決のために、資料等から解決に必要な情報を集め、示された条件に沿って理由や自分の考えを論理的に説明したり、記述したりする力）」や、「学びに向かう力」等の育成については、更なる指導改善が必要である。教育委員会が授業改善のための方策として示して

いる「子どもの声でつくる授業」を核としながら、各学校で進めている「主体的で対話的で深い学び」を実現していくための取組を継続していくとともに、授業構想段階から指導主事が関わるなどの授業づくりへの支援を充実させていく。昨年度、市教育研究会中学校国語部会では、生徒と共に単元を通した言語活動を設定し、「めあて」を決定しながら取り組む「子どもの声でつくる授業」にもとづいた授業を全ての部会員が実践し、その成果と課題を部会としてまとめる取組を行った。このことも、中学校の国語が全国平均並みとなった要因の一つであると考えている。市教育研究会の教科部会と連携した取組も推進していく。

なお、算数・数学については、依然として課題である。数学的な問題発見や問題解決の過程を学習において実現することを重視した数学的活動の充実により算数・数学好きな児童生徒を育てていくとともに、数量や図形概念等の構築や思考力・判断力・表現力等を育成する。教育委員会が行っている各学校年2回以上の訪問指導の内、1回は算数・数学を指定していることから、担当指導主事を中心に授業構想段階から関わり、算数・数学の授業づくりに取り組んでいく。さらに、今年度から取り組み始めている算数・数学アドバイザーの指導を各学校へ広げていく。

理科についても、小学校1・2年生の生活科の授業から、体験等による気づきの質を高め、比較・検討しながら物事を考えていく力を育てていくと共に、小学校3年生以降の問題を見いだしたり、仮説を立てて実験や観察を行ったりしながら結論へと導いていく授業づくりを大切にする。本年度は、協調学習の指定校のうち2校が年2回の授業公開を理科で行う予定にしている。この取組を各学校へ広げていく。

協調学習として取り組んでいる知識構成型ジグソー法は「思考力・判断力・表現力」を育成するための手法として適していると考えている。このことは、昨年度実施した指定校生徒の意識調査からも生徒が主体性や協働性を実感しやすいことや学習した内容が記憶として残りやすいことが明らかになっている。したがって、協調学習指定校の取組を各小中学校にさらに広げていく。

また、課題を解決するために目的をもって読み、情報を収集・整理して自己の考えを構成していく授業づくりについては、指定校の取組を中心に推進していく。そして、これまで継続してきている学校図書館活用教育の取組も一層推進していく。

これまでの4年間は、中学校に課題が見られたことから、指定校を中学校としてきた。本年度からは、指定校9校のうち、7校を小学校指定校としている。指定校の取組を推進しながら小学校の授業改善が進むように働きかけを行っていく。

(3) 「夢や目標をもって取り組む指導（キャリア教育）」「学級経営」の充実

「子どもの声でつくる授業」を実現していくには、「落ち着いて安心して学習に向かえる環境・学級づくり」や「夢や目標をもって取り組む指導」等の確実な積み重ねが重要となる。安心して学習に向かえる環境・学級づくりについては、生徒指導担当指導主事とも連携を図り、各学校の取組を支援していく。また、県教育委員会の指定で実践を積み重ねてきたキャリア・パスポートの研究実践を基盤としながら、キャリア教育が組織的に展開されるように小中連携教育とも関連させながら取り組んでいく。

この小中連携教育では、メディア接触や家庭学習に対する課題を解決していくために、家庭学習を軸としながら、児童生徒が自ら時間をコントロールしながら取り組む力を育てていくことを重点として取り組んでいく。

(4) 「〇〇の勉強は好きだ」という児童生徒の割合を増やす

国語、算数・数学、理科いずれも「内容がよく分かる」と反応する割合と「好きだ」と反応する割合とにギャップがある。「その勉強は大切だ」「役に立つ」ということは認識し、「内容もよく分かる」ことがそのまま「その教科の勉強が好き」ということにつながっていない。上記の取り組みの充実により「その勉強は好きだ」と思う児童生徒を増やす。

